

青丘文庫研究会 月報

No.257

2011年10月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

韓学同史編纂企画の波紋

—「在日」の青春群像の記述という夢想—

玄 善允



その昔、特に1960年代から1990年代半ばにかけて、日本のあちこちの大学には「在日」の学生サークルがいくつもあった。そのうちで「北」の立場に立つのが「朝鮮文化研究会」(朝文研)あるいは「朝鮮歴史研究会」(朝歴研)を名乗り、その統括団体として朝鮮総連傘下の「朝鮮留学生同盟(留学同)」の中央、地方本部があり、「南」の側に立つものは韓国文化研究会(韓文研)あるいは韓国歴史研究会(韓歴研)を名乗り、その連合体として東京、名古屋、大阪、京都、兵庫に、韓国民団中央本部・地方本部の傘下団体として在日韓国学生同盟(韓学同)の中央・地方本部があった。数が減ったとはいえ前者は今でも健在らしいが、後者は今ではわずかに京都にその名残が、といった程度らしい。しかしともかく残っているのだから過去形で語るのは事実には悖るのだけれど、少なくとも僕の感じではなくなつて久しい。それはおそらく、ぼく自身が韓国歴史研究会、そしてその延長で韓学同に所属していたこともあって、思い入れと感傷が絡まってる印象なのだろう。

そんな韓学同の歴史編纂という話が持ち上がったのが2、3年前のこと、その話は僕に少なからぬ精神的動揺をもたらした。

まずはそうした企画がありうるということに、驚いた。僕が経験した学生組織の運動総体の歴史が編纂に値すると考えている人がいる、その事実には僕は啞然としたわけである。それはなにも、僕がそれを「ひと時の遊び」めいたものだったのではない。僕でもそれなりに懸命だったし、その組織での活動の結果、親団体である民団を除名され、さらには、その後20年以上にわたって韓国政府から旅券発給を拒否されるなど、人生に大きな足かせがついてしまった。僕はその後の人生をその後遺症を抱え、それをごまかしながら生きてきたという感じまでである。しかし、だからといって、その学生組織の運動が歴史として書かれ、表舞台に出せるほどのものだとはいえ、思ってもいなかったのである。

そうした僕固有の「僻み根性」の延長で、趣旨文の「美しさ、勇ましさ」にも驚いた。「祖国における民族民主運動の一翼を担った在日の学生運動」といった類のものである。なるほどそういう見方もできなくはないのだろうが、僕にとっては、それは違う、という感じが強かった。協力するのは難しいなあ、と思った。

しかし、そうした感じ方が僕一人のものなのかどうか自信がなかった。そこで、昔その団体に関係していた知人、友人たちに意見を求めてみた。そしてまたまた驚いた。厳しい反発から冷たい黙殺までと実に多様なのだが、その提案に対して好意的な者はあまりいなかった。

その意味では、僕の違和感は決して僕だけに限られたものではないのだから、驚くことではないはずなのに、僕はそのことに驚いたのである。僕だけがその経験を後生大事にしていると思ひこんでいたことの浅はかさ、傲慢さ！若かりし頃のほんの短い経験が、少なからぬ人々の現在に後を引いている。多くの人が否定的であれ肯定的であれ、あの学生時代の延長上で生きているからこそ感情的な揺れを否定しがたいのではあるまいか。としたら、それは書かれるに値する、と僕は考え出した。但し、企画のラインに沿ってのものではない。政治運動の歴史、あるいは、政治路線の変遷、対立といったレベルで僕が何かを書くなんてことはありえない。なるほどさまざまな路線があり、その選択を迫られた。それで傷を負い、互いにすっかり関係を絶ったりするということがなかったわけではない。しかしその多くは、状況認識、展望、戦略、戦術なるものをある程度理解したうえでの選択というよりも、個々人の事情（家庭の事情もあれば、性格、信頼関係など）によって左右されることが多かった、というのが僕の経験的信憑だからである。

あの頃、僕らは何故集まったのか、何故あれほど長時間を一緒に過ごしたのか、何故、あれほど議論をし、そのあげく非難しあったり、心中に不信を抱えこんでその後を生きてきたのか。あれほど同胞、民族、民主化、在日の權益、祖国統一などを口にしておきながら、その後、それとは全く背反したり、あるいは、まるでそんなことなどなかったかのような多種多様な生き方をしてきたのか。そうした「在日」の青春とその後の姿が書かれて悪かろうはずもない。そう思うようになった。それは何かを誇ったり、何かを批判したり、といった代物ではありえない。同じ言葉を語り、共通感情に浸っているつもりでいても、その裏で蠢いていたもの、隠されていたもの、意識に明確に上らせることができなかったことども、それが老齢に至った今でも明らかにならないままである。そんなことどもを記してみたいと切実に思うようになった。「正史など糞くらえ！」というわけではない。しかし、それはそれにふさわしい人々の仕事であって、僕ができることはと言えば、個々人の屈託、背伸び、反省、諦念、居直り、それらが絡み合った在日二世三世の意気が上がらない青春の姿の記述くらいなものである。多様と言えば多様、しかし観点を変えれば、単純と言えば単純、そんなことをぼつぼつ書き始めている。ところが生憎なことに、その種のやくざな駄文にふさわしい発表媒体が見つからない。どなたか、紹介してくだされませんか。

第327回在日朝鮮人運動史研究会関西支部会（2011.7.10）

「京都山科地区の近代と朝鮮人労働者」

高野昭雄



京都と大津にはさまれた現京都市山科区は、鉄道や道路が多く貫通する交通の要衝であり、1931年に京都市に編入された。1914年にはじまる東海道線新線工事、なかでも山科・大津間の新逢坂山トンネル工事には、多くの朝鮮人が従事したことが、当時の新聞記事からすでにわかっているが、京都・山科間の東山トンネル工事に朝鮮人が従事したかどうかは判然としない。

東山トンネル工事に従事した朝鮮人が、そのまま京都駅南の鴨川西岸の低湿地に定住していき、東九条が京都市最大の朝鮮人集住地となっていたと語られることがあるが、宇野豊氏がすでに指摘しているように、こういった事実は実証さ

れていない（宇野豊「京都東九条における朝鮮人の集住過程（一）―戦前を中心に―」世界人権問題研究センター『研究紀要』第6号、2001年3月、73～74頁）。

その他、本研究では、園部綾部間の鉄道工事や宇治川水力発電所工事も含め、土建会社と各工事における朝鮮人労働者との関係について整理した。また、京津国道改修工事と朝鮮人労働者、車石との関係について紹介した（車石研究家・久保孝氏の御教示による）。牧場の牧夫として働いた朝鮮人や馬方や職工として働いた朝鮮人についても報告した。山科地区では、インフラ整備を担った土工をはじめとして、様々な仕事に朝鮮人が従事していた。



軍人・軍属 浜松の研究家調査

2011年(平成23年)9月3日(土)夕刊 (金沢市) 朝鮮半島動員

太平洋戦争中に朝鮮
 半島から動員された韓
 人・支那約28万人の全
 國民総動員制度下で、
 近代兵器製造のために
 人たど(支)に送られ
 の動員で明らかとなっ
 た。日本政府は韓国
 領に引き渡した韓人・
 支那人の存在を調査
 した。朝鮮半島田舎の
 韓人・支那人は数人を

風化など音知が不明な
 ったが、アジア・太平洋
 洋全域に配備された全
 体像が初めて判明し
 た。多くの雑誌報を出
 したニューヨーク紙
 で朝鮮半島出身者が配
 属された全部隊名と人
 数など、初めて明らか
 になった事実も多い。
 竹内氏はこの調査した
 名簿を、日韓「慰安

名將(ひとり4人)
△「王國名將」(ひとり2人)△「軍師名將」(ひとり4人)
△「田舎軍」(ひとり4人)
名將(ひとり4人)
田舎軍名將と戦った名將は第1期名將風情が完成した。軍人や軍師の歴史が誕生した。これはふたたび記述された。

名簿は日本国内で
本人や親族などとして
公開された。83年に
本政府が韓国政府に
手渡し、韓国国史記
院で管理された。89
年と日本人使節が訪
韓が可能になり、竹
島が10年に回帰
し調査、検討した。
調査先は日本巨港
釜山、仁川など。調査

陸軍半島約5万
 ○△中国（巨州）
 約40万
 ○△日本約1万
 △南方諸島約1万
 ○△航空軍・船
 軍（日本）2万
 である。その他
 い地境より巨州へ
 5万5千人、中国
 2万3千人、日本
 1万4千人を
 運送は、艦船（海
 軍半島部の運送）理
 約2万、中国約1
 万、日本約1万、
 朝鮮・興・佐賀・
 神・大津などの運送
 8万人。総運送
 計約28万人になる。
 阿そま、佐賀（海

[illegible][illegible]

國を讀むものなり
 此は宋の詩と云
 高が爲。宋の詩
 の記述も、日本
 文に對する言は
 ぬ事なきに似
 たり。國定と云
 ふは、今と云ふ
 事なり。

【题眼】

神戸学生青年センター内 飛田（ひだ）

●青丘文庫研究会のご案内●

■第329回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

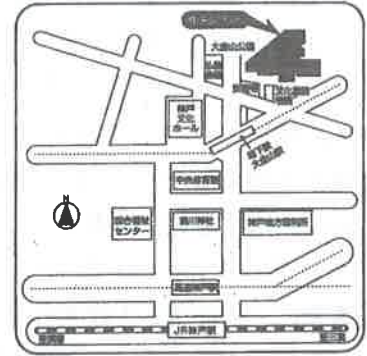
10月9日(日) 午後3時～5時

「宝塚韓国小学校の沿革

—1957年から1962年まで— 渡辺 さえ

■朝鮮近現代史研究会はお休みです。

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



●神戸学生青年センター・朝鮮史セミナー2011 秋

『非常事態宣言 1948—在日朝鮮人を襲った闇』

講師：ルポライター・金賛汀さん/2011年10月8日(土) 午後3時～5時/参加費：600円

会場：神戸学生青年センター/主催：朝日病院・神戸学生青年センター

※当日午後5時半より出版記念会を開きます。詳細は、学生センター飛田までお問い合わせください。

●神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者追悼の会/ 日時：10月16日(日) 午後0時

会場：同モニュメント前(神戸電鉄湊川駅より徒歩10分)

終了後、烏原公園で焼肉の会があります。要申込。/問合せ：事務局(学生センター内、飛田)

●東学思想・文化講座

「東学の霊性と生命平和思想」 高麗大学教授 金容フィさん

「東学の修練体験」 都留文科大学教授 邊英浩さん

日時：2011年11月5日(土) 午後3時～5時

参加費：無料/会場：神戸学生青年センター/主催：天道教中央総部(韓国)・神戸学生青年センター

【今後の研究会の予定】

2011年11月13日(日) 在日(未定)、近現代史(朴炳涉)。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

11月号以降は、全淑美、塚崎昌之。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

■厳しかった夏も終わり、一挙に秋がやってきた今日この頃です。いかがお過ごしでしょうか。■8月のソウルセミナーも個人的レポートを堀内稔さんが『むくげ通信』248号に書いています。同号に飛田が海南島「朝鮮村」のことなどを書いています。ご希望の方は、学生センター飛田まで。無料でお送りします。

■こちらは有料ですが、神戸・南京をむすぶ会『南京・海南島フィールドワークノート』(A4、88頁、560円)、同『報告集』(A4、54頁、480円)を発売しています。希望者は、送料(80円)を加えた金額を切手でお送りください。学生センター飛田までお送りください。■来月は、もう忘年会です…。

飛田雄一 hida@ksyc.jp